かつて入所者が検査や消毒などを受けた収容所（回春寮）

兵庫教区仏教壮年会連盟

長島愛生園で現地研修会 差別・偏見の歴史を学ぶ

兵庫教区仏教壮年会連盟（野村幸男理事長）は、ハンセン病に対する正しい理解と、その歴史を学ぼうと、岡山県瀬戸内市の国立療養所「長島愛生園（あいせい）」で３月30日に現地研修会を行いました。関係者によるお話や園内の史跡を巡りながら、長年にわたる間違った国の強制隔離政策の実態やハンセン病に対する差別・偏見の歴史などについて学びました。

真宗会館で鈴木さんの話を聞く参加者

兵庫教区は、毎年11月に営む長島愛生園の報恩講法要や入所者の葬儀などの法要儀式を長年にわたり執り行っています。また、教区ビハーラでは同園で清掃活動を行っています。

昨年12月、同教区仏教壮年会連盟の理事会で、出席者から「ハンセン病のことやその歴史について自分自身が誤った捉え方をしていないだろうか。ハンセン病問題に対する正しい理解を得るための研修の機会を作ってほしい」との強い思いの意見が出され、長島愛生園での現地研修会が決まりました。そして、2月25日に開催された「兵庫教区仏教壮年の集い」をはじめ、教区内各組（そ）の理事がこの研修会の参加を仏壮会員だけでなく、有縁の人々にも幅広く呼びかけたところ、61人が参加しました。

長島愛生園に到着し、2班に分かれた参加者は、愛生歴史館で学芸員からハンセン病の歴史や入所者の心情を表した展示などの説明を受けました。そして、患者収容桟橋跡や、登録有形文化財である旧収容所では消毒風呂や独房跡、納骨堂などを実際に見て、ハンセン病や入所者への理解を深めました。

園内にある真宗会館では、お仏壇の前でおつとめをし、入所者で真宗同朋会の会長を務めておられる鈴木幹雄さんのお話に耳を傾け、全体会では9人からの質問に丁寧に答えていただきました。現在、真宗会館を管理するのは鈴木さんお一人だけになったそうです。

長島愛生園の入所者は2年前には118人おられましたが、現在83人で、平均年齢は88歳。研修会当日の朝にもご往生された入居者の葬儀がありまし

故郷に帰ることができなかった入所者の遺骨が納められた納骨堂

た。鈴木さんは「差別された入所者の方々が亡くなっていかれ、ハンセン病差別の歴史が風化してきていることに危惧の念を抱きます。偏見や誹謗中傷で多くのハンセン病患者の尊厳が傷つけられた歴史を二度と繰り返さないよう、長島愛生園の歴史的建造物や史料を後世に引き継ぎ、残された記録で正しく認識し理解していただきたい」と話しました。

参加者からは「差別や偏見のない世界をつくりあげていくために、ハンセン病の歴史から学べることはたくさんあると思います。新型コロナが大流行した時期に感染者やその家族に対する差別や偏見、嫌がらせが全国的に相次ぎました。誤った知識や見解が偏見や差別につながると思います。現地で実際に見て話を聞けてよかった」といった感想が多く聞かれました。

副理事長の戸田勲さんは「参加者の8割が長島愛生園に初めて訪問した方でした。40代や50代前半の仏壮会員をはじめ、僧侶や坊守（ぼうもり）、仏婦会員にも参加していただき、さまざまな立場や年代の人たちが共に学び、実りある研修会となりました」と振り返りました。

理事長の野村幸男さんは「長島愛生園を訪問して、今まで知らなかったハンセン病差別の現実を目の当たりにし、衝撃を受けました。今回の学びを大切にし、教区仏壮連盟で『御同朋（おんどうぼう）の社会をめざす運動（実践運動）』を推進していきたい」と話しました。